

注解『七十一番職人歌合』稿（三十）

下 房 俊 一

凡 例

- 一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第六十三番および第六十四番の注解を収めた。
- 一、第六十四番について、底本は会話の順序を示す記号「一」を脱するが、□を付して私に補い、それを基準として諸本との異同を示した。

六十三番 競馬組 相撲取

〔職人尽〕

〔鶴岡放生会職人歌合〕九番左 相撲

日は入て月こそ空にねり出れ独すまひの心地のみして

とりもあへす心にかくれともいさとよそれもうつるならひは

判云、月は衆星あれとも一月にはしかすと申とあり。おかしく思よそへて侍かな。……為持。恋は、両方の作者、申なれたる詞つかひ、思ならはしたることくさ、哥となりてもいひしりて侍へし。さるにても、左うるはしく侍り。為勝。

〔吾吟我集〕 寄相撲恋 下帯にまだ取りつかぬわが中は力及ばぬ荒相撲哉 〔古今夷曲集〕 相撲 笑種ことばにかかる
 負け相撲たまたま出ては手をもえとらずへ器音▽ 相撲に負けぬる方いなびけるをみてよめる かつにのり手とるに
 足をとられつつ負けぬる方ややすまふといふへみつなか▽ 〔後撰夷曲集〕 相撲 いさけふは在郷祭にまじりななくれな
 ばなげの勝相撲かはへ忠直▽ 思ふ手に取れど何共取られぬは水の中なるつきずまふかもへ知秋▽ 下くくるそりに足こ
 そ弱からめ結ぶ相撲の手はすぐれてもへ一見▽ 手あひして負けたといふは投げにやる売物ならで相撲なりけりへ之時▽
 右よりも力落つれば今ははや左相撲となりて負けぬるへ満水▽ どちらの勝手も知れぬこけ相撲おぼつかなしや行司
 次第はへ正勝▽ 力相撲手品はなくてゑいやつと何あひさうもなげの勝かなへ行重▽ 名乗りぬるは弓取なれやちだち
 の関のすまひをうつぼづけにてへ且保▽ 〔銀葉夷歌集〕 相撲 ならびなく此の手もきけるすまひやらともかくにもね
 ち付けぞするへ長也▽ 勸進相撲に思ひの外木戸銭取りけるに 立ちよりに見るも勸進相撲には抜き手にあふて足ぞ
 取らるるへト宥▽ 百首歌中に辻相撲 物売りの道妨げになるはただ此の辻中の相撲なりけりへ伯水▽ 〔人倫訓蒙
 図彙〕 相撲 相撲は天竺よりはじまり、摩阿陀国の切利首と婆羅門生といふもの、御門を召して取らせらるる也。本朝に
 ては、垂仁天皇七年、はじめて有是。聖武天皇神亀三年に、諸国相撲を召され、大和国蹶束と出雲の野見の宿禰と、帝を
 召し、取らしめたまふ。拔手と申すは、そのうちの上手をすぐり、御詠覽（まじ）あるによりいふ。相撲の節会、七月廿五日より
 廿九日までありしなり。今はなし。 〔狂歌乗合船〕 寄相撲恋 花取りの色にとりあひ足腰も弱るぞ恋の負け相撲哉へ嘈
 庵▽ 稀に逢うて手を取る暇もあら相撲なげの情けと是やいふらんへ走帆▽ つれなきにをのづからたつ腹やぐらつられ
 ても外のみまどりはせずへ流水▽ 打ちこけて取り乱したる思ひ寝の夢に逢ふ夜はひとり相撲かへ李郷▽ 頼めつつ来ぬ
 夜はこちが負け相撲手を取りぬれど力及ばずへ貞柳▽ 〔狂歌種ふくへ〕 (寄) 相撲 (恋) なんのそのままようき名は
 立ち相撲わかれても末にあはせ給へやへ走帆▽ 〔誹諧職人尽〕 けいばぐみ・角力取 落ちたるがことに目立つや足揃へへ
 嵐雪▽ くらべ馬持になるといふ事はなしへ玉芝▽ くらべむま神の科かは負のかたへ周木▽ 松風や天窓は暑きくらべ
 馬へ錦綉園▽ あふちの木古路もあれば 夢さめて競馬はあとの祭哉へ文市▽ くらべむま冠の紐のゆるみけりへ祿祥
 火消しにも姿ありけりくらべ馬へ寥和▽ 昔聞け秩父殿さへ角力取へ芭蕉▽ 角力とり並ぶや秋の唐にしきへ嵐雪▽

部にも住みまじりけりすまふ取へ去来へ つねづねは後生願ひや角力取へ史邦へ わが宿へ負うて帰る歟すまふとりへ
 前 白雪へ 見合はせて妻の諫やすまふとりへ魚貫へ 根津鈴鹿根や分けそむる深見草へ正興へ 七転び八起き也けりす
 まふとりへ秋社へ 前髪の秋を惜しむ歟相撲取へ露計へ 翁の句にすがりて 雪ならばころんでも見よすまふ取へ陶巾へ
 禪は殿の力やすまふとりへ拳遠へ 足あとに女有りけり辻すまふへ沙文へ 寝姿の淋しや雨のすまふ草へ柳隣へ 一人
 して年の歩みや相撲とりへ寥和へ 〔職人尽発句合〕 六十二番左 角力 夏木立いと丈高し名取山 名取山の夏木立に
 丈高くほろほろ降りかかる雨の脚に、題を結びとめし自在は、俳諧の天耳天眼の通力にして、滑稽の詞、不窮端妙義なる
 べし。猶、名取山、力まさりて勝つべくや。 〔職人尽狂歌合〕 左 すまひとり めでばやな寝るは角力の忌詞西の方屋
 へ月の入るまで 左、心おもしろく聞こえて侍り。……西の方屋、いささか勝りて侍るべくや。 「ゆゆしき勝をとりて
 候へば、君だちとかくに纏頭せられて候ふ。よろこび申しに、いざ、御さじきへ参らばや」 左 角力取 大空も晴
 れ角力なる西東とりわけてよきな秋の月 左、とりわけての詞、興あり。……勝負は左の最手に譲るべくや。 角
 力とり・同 寝る事は忌むてふ秋のすまひとり蚊に負けながら月を詠めつ 大関と角力仲間もあふぎ見る月人男裸百貫
 左、四の句、たくみに聞こゆ。右、下の句、めづらし。但し、月をさして大関とはめたるは、相撲の詞にまつはれたるや
 うにて、つきなく聞こえ侍り。纏頭は左の力士にあるべくや。 左 すまひとり かたぶくを惜しむ角力は西方の関
 ともなりて月をとどめよ 左、題詠には入る月を詠まずなど申す人侍るめれど、昔もためし侍るにや。関ともなりてなど、
 おもしろく聞こゆ。……左、勝りぬべくや。 右 相撲とり 雲の上かかるとめしもあり原や晴れ勝負なる月の夜角
 力……右、大鏡に見へたる業平朝臣の角力のふる事によそへて申されし、甘心せられて侍り。左右、和漢のふる事、い
 づれか勝りいづれか劣り侍らん。定めがたし。 左 すまひとり 勝角力やんやとほめて花よりは団子とらせん月の
 夜遊び 左、角力人に纏頭するを、今の世に花といふめれば、さてそれを、世のたとへにとられしおもしろさ、大方には
 侍らず。……左、なべてならざれば、勝ちて侍るべし。 右 角力取 月を愛で我も角力の年寄となるも横に寝ね
 ぬ秋の夜……右、これも、つもれば人のと申す歌の心にて、寝もせて月に向かへるさま、感気少なからず。可為勝。 左
 左 角力取 角力より晴天十日かつら男を相手にくまん此の月見酒 左、かつら男を相手にくまんなど、めづらかにて、

狂じたるさま、ふかく侍り。……左、またき勝にこそ。 / 左 角力取 照り渡る光ぞ強き秋の夜には寝ぬを勝す
 まひとて 左、勝すまひ、首尾よろしく続けられて侍り。……いささか、左のすまひ強き方は勝りて侍らんや。〔近世
 職人尺絵詞〕相撲 相撲は晴天にありて、ともし油売りありく頃は、打出しの太鼓となれば、傘にちなみ無く、挑灯に
 えにし無し。されども、大黒傘とけんどん屋の挑灯とは、骨の太きをもて、角力取りにもたぐふべくや。「少し負けて参
 らせ候ふ」「油の事にまれ、負くるとは心がかりや」「心なのむら雨や。あすの五日目も竟東なきぞ」「どんつくどんつく
 と鳴れるは、われわれが身の上をいふにやあらん」〔難波職人歌合〕上五番左 角力取 天の原むらがる星にとり分き
 てはと見ゆるや月人男 右の方人云、相撲紀を見れば、占手、最手、助手、加手などの名有りて、助手を脇手とも云へ
 るよし、江次第にも見えたるは、今の世、大関、関脇、小結、前頭などいふものの事なめれば、其の心とは聞こえたれど、
 此の作者、いかにすまひ人なればとて、月星をさる物にいひなしたる、余りにことやうなりとやいはまし。左方こたふ、
 古今の序に、大和歌は人の心を種として万の言の葉とぞなれりける、と有るがごとく、角力の方に深く心を入れたるより、
 月を見てもやがて其の心の歌はれたるにて、歌のまことこそいふべけれ。……判に云、左の歌、右の方人の論はいとせ
 まし。万葉集の歌には、月をきぬがさに見なしたるさへありて、其の心々に云ふこそ歌なれ。且つ、此の三の句、取りわ
 きてといふ詞に、脇手の名をさへ詠み入れられたる、又、同じき月をも月人男といはれたるにて、一首の姿こよなうをか
 しきぞかし。……左の姿もをかしけれど、聊はいかめきたれば、猶右の方を勝とすべし。

【本文】

六十三番

くるゝまでまちをくれつるさほひ馬
 こゝろならすや月にのるらむ
 影ほうし見くるしければ辻すまふ
 月をうしろになしてねる哉

くるゝまでまちをくれつる―「類」暮るまで待をくれたる
 こゝろならすや―「類」心ならすや らむ―「明」「類」らん
 影ほうし見くるしければ―「類」影法師みくるしければ

左右ともに、心詞くみあひたるけいは、
すまふなれば、勝負ありかたし。よき持
たるへし。

をひ馬のをくれはてたるわれなれや
とりつきかたきこひもするかな

わか恋はさつまの氏のおきなれや

かた手にたにもあふ人のなき

左右、おもしろきこゆ。猶、右は、かの

氏おさかあふ人のなかりけん、よくとり

よれり。可為勝。

◇

◇

けいはくみ

むかしは上さま

にももてなされし

事の、いまはこの

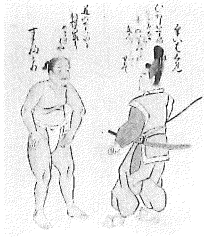
氏人のみにのこりて。

すまふとり

道のおもひ出に、

相撲の節に

めされはや。



負―〔忠〕〔明〕〔類〕 眞

をひ馬―〔忠〕〔明〕おひ馬〔類〕おい馬 われ―〔類〕我

とりつきかたきこひもするかな―〔類〕取つきかたき恋もする哉

かた手―〔類〕かたて あふ人―〔類〕逢人

けいはくみ―〔白〕〔類〕競馬組〔忠〕六十三番 けいはくみ 競馬組

事―〔白〕〔忠〕こと いま―〔類〕今 この―〔白〕〔忠〕此

のみに―〔白〕〔忠〕のみ

すまふとり―〔白〕〔忠〕〔類〕相撲取

おもひ出―〔白〕〔忠〕おもひて

相撲―〔白〕〔忠〕すまふ

〔語注〕

◎競馬組は、競馬の騎者。競馬は、古く禁中の年中行事として五月五日・六日に行われたが、安和元年（九六八）に廃止されて以降途絶えた。一方、上賀茂神社（賀茂別雷神社）では、寛治七年（一〇九三）以来、毎年五月五日、氏人に奉仕させて競馬が行われ、現代にまで至っている。

相撲も、古く禁中の年中行事として七月に行われたが、承安四年（一一七四）に行われて以来廃絶した。一方、春日若宮など各社では、神事としての相撲が続けられてきた。

◎くるゝまでまちをくれつる 「まちをくれつる」は、類従本は「待をくれたる」。番組の進行が遅れて出番が夕暮れになってしまった、というのか。「遅れ」に、相手に負ける意の「遅れ」を掛けるのであろう。

◎きはひ馬 競ひ馬。「競馬」に同じ。

◎ころならずや月にのるらむ 「月に乗る」は、月の明かりを頼りとする事。月夜の往来などについていう。もと漢文訓読から出た言葉で、漢文日記にしばしば用いられたが、和歌にも、「鴉の海や秋の夜わたる蟹小舟月に乗りてや浦つたふらんへ俊成女」(玉葉集五、秋歌下)など、まま例が見える。ここは、意に反して、「馬」ならぬ「月」に乗る、という洒落。

◎影ほうし見くるしければ 未考。瘦せた影法師が見苦しい、というのか。「影法師」、「見苦し」ともに、通常和歌に用いる言葉ではない。

◎辻すまふ 朝廷の行事としての相撲に対して、民間で道端などで随時行われる相撲。素人による相撲だから体格が劣るといふのか。

◎月をうしろになしてねる哉 未考。『新大系』は、「月を後ろにして（仰向けに月を見ながら）倒れることである（自分の影法師を見たくないの）」と解する。「寝る」は、倒れることを意味する相撲の忌詞か。後世の例であるが、「職人尽狂歌合」すまひとりの歌に、「めでばやな寝るは角力の忌詞西の方屋へ月の入るまで」とある。それを掛けるため、俗語的な「ねる」という表現を用いたか。

◎心詞くみあひたるけいは、すまふなれば 「組み合ふ」は、歌の心と詞が調和していることを言うのであろうが、それならば、普通は、「心詞かなひてよくこそ見給ふれ」(千五百番歌合、千四百番判詞)、「心詞あひかなひて侍るめれば、可為勝」(同、千百七十九番判詞)のように、「かなふ」、「あひかなふ」などの言葉を用いるところ。ここは、競馬・相撲の縁で、あえて「組み合ふ」を用いて、戯れたのであろう。

◎勝負 「競馬」、「相撲」の縁語。

◎をひ馬のをくればはてたるわれなれや 老馬が相手にはるかに遅れてしまったような私だからなのか。自身が老体であることを暗示する。「をひ馬のをくればはてたる」は頭韻。

◎とりつきかたきこひもするかな 「取り付く」は、すがり付くことで、ここは、先行の馬にびったりと付ける意で用いたのであろう。その意に、頼りとして取りすがる意を掛ける。先行の馬に取り付くことがむずかしいように、取り付く鳥もない恋だ、というのである。なお、「取り付く」は、「玉かつら這ふ木あまたもあるものを取り付くかたもなきぞかなしきへ信実」(新撰六帖、六)のような例がないではないが、和歌にはあまり用いない言葉。

◎わか恋は…… 「我が恋は……」という形式は、恋の歌の典型の一(五番語注「わが恋は」の項参照)。

◎さつまの氏のおさ 薩摩ノ氏長のことであろうが、「氏長」を「氏の長」(氏の長上の意)と誤ったか。あるいは、そのような伝承があったか。薩摩ノ氏長は、仁明朝の相撲の名手。詳伝は不明であるが、『新猿蓑記』・『今昔物語』・

『太平記』などにも引かれ、著名であった。

◎かた手にたにもあふ人のなき 『太平記』八・妻鹿孫三郎勇力事に、「薩摩国ノ住人妻鹿孫三郎長宗ト申スハ、薩摩氏長方末ニテ、力人ニ勝レ器量世ニ超タリ。生年十二ノ春ノ比ヨリ好デ相撲ヲ取ケルニ、日本六十余州ノ中ニハ、遂ニ片手ニ毛懸ル者無リケリ」とあり、氏長自身についても、片手で相撲を取っても、それに対抗できる相手がいなかった、などという話が伝えられていたかと思われる。「合ふ」は、対戦すること。その意に、男女が逢う意を掛ける。また、「片手に」に、片手間に、の意を掛けるか。時代は下るが、『東海道名所記』一の、「勸進聖になりてめぐる、その片手にあら見物せばやとて」などの例がある。(氏長が片手で相撲を取っても相手がいなかったように、)事のついでに逢っ

てくれる人もいない、と相手のつれなさを恨むのであろう。相撲が強いという肯定的なことから、片恋という否定的なことから転じた点がおもしろい。

◎おもしろくきこゆ 「おもしろし」は歌論用語。

◎とりよれり 「取りよる」は、歌合判詞に少数ながら、「あすかがはふちはせになる事、つねにきこゆるにとりて、この歌は氷にとりよれる、たくみななるにや」(千五百番歌合、九百二十七番判詞)などの用例がある。素材を取り合わせる、というほどの意味であらう。ここはそれに、相撲の縁語「取る」、「寄る」を掛けて戯れたか。

◎むかしは上さまにももてなされし事の 古く禁中の年中行事として五月五日・六日に行われていた競馬のことをいう。「上さま」は「うえさま」と読むのであろう。(『新大系』は「かみさま」と読む。) 天皇のこと。

◎いまはこの氏人のみにのこりて 「のみに」は、白石本・忠寄本は「のみ」と「と」を脱する。これでも意味の通じないことはないが、誤写であらう。上賀茂神社で毎年五月五日に行われる競馬のことをいう。

◎道のおもひ出に、相撲の節にめされはや 「道」は、相撲の道。「相撲の節」は、禁中の年中行事で、毎年七月、諸国から召された相撲人が、天皇の前で相撲の勝負をした儀式。保安年間(一一二〇―一二四)に中絶し、その後、保元三年(一一五八)と承安四年(一一七四)に行われたが、以降、廃絶した(国史大辞典「すまいのせち」の項)。ここは、時代を古く設定した言葉。

〔絵〕

競馬組は、冠に老懸を付け、半臂・袴の上に袴褌を着、草鞋を履く。腰に豹毛の尻鞆の太刀を佩き、右手に鞭を持つ。相撲取は、髪を束ね、裸体に褌のみを着ける。

〔参考〕

○ ねるは誰が子ぞ誰と知らせよ

神祭る場の相撲のとりどりに

△宗砌▽

(初瀬千句、八)

○ つつと入る堂の仏は阿弥陀にて

すまひの取つ手四十八あり

(竹馬狂吟集)

○是は、日本におゐて隠れもなき相撲取にて候ふ。日本の相撲はことごとく取り伏せ、渡唐いたひて、はや大唐の相撲も、大方取り伏せて候ふ。

(天理本狂言「唐すまふ」)

○総じて相撲の手は四十八手とは申せ共、碎けばいかやうにも取りまらする。某は国元にて名を得たる鼻取相撲と申す取り手でござるが、弱ひ鼻をば根からくつと引き抜きまらする。強ひ鼻は、頬先まで引きゆがめておきまらする、と仰せられひ。

(虎明本狂言「鼻取すまふ」)

○いや、今思ひ出いた。おちじやものの所からおこされた相撲の書が、違ひ棚にあらふ程に、それを取つてこひ。

(同「ふすまふ」)

○森山の者ならば、相撲所じや程に、さだめてよう取らふ。

(同「かずまふ」)

○激しく華々しく賑やかな勝負事は相撲以外にはない。その相撲は戦に備えて彼らの間で行なわれる訓練であり技術である。

(日本教会史、一巻、十章)

○それらの芸は七つ挙げられる。……第五は相撲をとることで、これは彼らの間で大に行なわれていて、武家貴族の若者の間では戦争の訓練としてなされている。

(同、二巻、一章)

六十四番 禅宗 律家

〔職人尽〕

〔人倫訓蒙圖彙〕 禅宗 達摩大師の所立。人皇八十三代土御門院御時、建仁二年壬戌に九番に渡る。用ゆる所、教外別伝、不立文字なり。 / 律宗 天竺菊多三蔵の所立也。人皇四十四代元正天皇の養老元年丁巳に五番にわたる也。律に大乘小乘あり。

用ゆる所、律三大部、四分律、五分律等なり。〔誹諧職人尺〕 禅宗・律家 西吹くは達磨の息か秋の風へ貞徳へ 何もなく

我が頭陀袋夏はらへへ沢菴和尚へ 一葉散る鳴一葉散る風の上へ嵐雪へ 食堂に雀鳴く也夕しぐれへ支考へ 禅林の松の落葉や

かみな月へ凡兆へ ことからしや夜の落葉に明けやらぬへ李下へ 我が目には師走八日の空寒しへ杉風へ 禅林の苦みを秋のさく

ら哉へ百里へ 享保十四酉年四月象渡る 初に見て象先和尚我を折られへ古 白雲へ ぶんまはし眠りて居ても月まどかへ常

仙へ 貯へぬ僧のけしきや石路の花へ笠間 得秀へ 達磨会やあぶらげの棒くらはせんへ黙齋へ 山ざくら暮の花や無一物へ五

滴へ 蟻引きの袖に悟りの暑さかなへ有佐へ 煎じ茶に霞ふる夜や江湖寮へ和葉へ 冬枯れのはせをや禅の心もちへ秋社へ 寺

にめでて木魚に悟る落葉哉へ白沾へ 小便に行くも放参かんこ鳥へ寥和へ 菊の香や葉の名をも西大寺へ寥和へ 〔職人尺狂歌

合〕 右 (寄) 禅宗 (恋) 恋心静めつ禅のさとりほど開くも嬉し妹が玉章 ……右、開くという文字、おかしげなり。一首

よく聞こえて侍り。されど、左には及ぶべからず。 / 左 (寄) 禅宗 (恋) 心より心に伝ふ恋なれば祖師の達磨の目をも

いとひつ 左、以心伝心のおきておかし。…此のつがひ、左右等しくや。 / 右 禅宗 腰張りといふなりては禅宗の壁を

憎める今のつれなき ……右、面壁のさま、わりなくおかし。左右、よき持にて侍るべし。

【本文】

六十四番

ねふらねはきやう尺までもなかりけり

さやけき月を伴道にして

観念のつきあきらかにみるまでは

わかおこなひもさい大しかな

ねふらねは―〔忠〕ねふらね〔類〕眠らねは なかりけり―〔類〕
無りけり

つき―〔類〕月

わかおこなひ―〔類〕我行ひ

左は、坐禅のゆかに月みるらむ他念こそ、
 きやうしやくもあたりぬへけれど、月
 を断心、尤ふかし。右は、寺の名によせて、我
 宗をあらはすはかり也。左には及かたぐや。

恋しさのたゝほんしやうをつくさねは
 へちに障導のなきはなきかは

中ゝにわれなすゝめそしやいんかい
 たもつやいなやこひはわすれし

左は、恋すれとも、猶ほん生をなけきたり。

右は、猶かいをやふらんの心ふかし。罪のすゝむ
 所、いましめふかきによりて、猶左可勝。

禅しう

二

文字の上をきては、
 御不審たつへからす。

若如何とならば、口を
 ひらかすすとひきたれ。

律家

日



坐禅ー〔類〕座禅

きやうしやくー〔忠〕きやうしや〔忠〕経釈

はかりー〔類〕許

ほんしやうをつくさねはー〔類〕本性を尽さねは

障導ー〔忠〕障碍

われー〔類〕我しやいんかいー〔類〕邪姪戒

こひはわすれしー〔類〕恋は忘し

ほん生ー〔類〕本性

猶ー〔類〕なを かいー〔類〕戒 ふかしー〔類〕深し

ふかきー〔類〕深き

禅しうー〔白〕〔類〕禅宗〔忠〕 六十四番 禅しう

二ー〔白〕ナシ

をきてはー〔白〕おきては

たつへからすー〔白〕立へからす

とひきたれー〔白〕問来れ

一ー底本・〔白〕ナシ

けうけ別伝と申候は、
なとや祖師とは仰候そ。

けうけー〔白〕教外

〔語注〕

◎禅宗は、座禅によって仏道を極めようとする宗派。ここでは禅宗の僧の意。

律家は、律宗の僧。律宗は、戒律をことに重んじる宗派。

禅宗と律宗とは、合わせて「禅律」と呼ばれることがあった。

◎ねふらねはきやう尺までもなかりけり 「きやう尺」は、「驚尺」・「警釈」・「警策」などと書く。座禅のとき、僧の肩を打って、眠気を覚ましたり、心を引き締めたりするための板状の棒。(月を愛でて) 眠ることがないので、驚尺の必要がない、というのである。

◎伴道 未考。禅家で用いる言葉か。ともに修行する仲間のことか。

◎観念のつきあきらかにみるまでは 「観念」は、仏教語で、雑念を退けて諸法の真理を見、心にとどめること。その境地を清澄な満月にたとえて、「観念の月」という。「明らかに見る」は、その境地に確かに至ること。その意に、空の月を見る意を掛ける。「明らか」は「月」の縁語。

◎わかおこなひもさい大しかな 「行ひ」は仏道修行。「最大事」は、もっとも大事なことの意で、ことに、「慈覚大師は、……異朝にしては、八大徳並に南天の宝月三蔵等に、十年が間、最大事の秘法をきわめさせ給へる上」(撰時抄)のごとく、仏教教義上の最大事を指す。その意に、「西大寺」を掛ける。「西大寺」は、平城宮の西(現奈良市西大寺町)にある律宗の寺。なお、本職人歌合は明応九年(一五〇〇)ごろ成立したとされる(岩崎佳枝『七十一番職人歌合』成立年時考)へ「文学・語学」九六号、昭和五十八年一月)が、西大寺はその直後、文亀二年(一五〇二)、兵火によって主要伽藍を焼失している。

◎坐禅のゆかに月みるらむ他念こそ、きやうしゃくもあたりぬへけれとも 「床」は禅などをするとき用いる台座。

「他念」は雑念。「きやうしやく」は、忠寄本は「きやうしやく」と「く」を脱するが誤写であろう。類従本は「経釈」の字を宛てる。坐禅をしながら雑念を起こして月を見ていることこそ、驚尺に打たれるべきことではあるが、というのである。

◎月を翫心、尤もふかし 「翫ぎ」は、愛で楽しむこと。月を愛で楽しむ心が深く、題意にかなっている、というのである。

◎寺の名によせて、我宗をあらはすはかり也 「西大寺」という寺の名によって律宗ということを表しただけで、他に特別な長所がない、というのである。

◎恋しさのたゞほんしやうをつくさねはへちに障導のなきはなきかは 『伝燈録』十四、龍潭崇信の章に見える、道悟が崇信に与えた言葉、「但尽凡情、無別聖解」を踏まえた表現か。(管見に入った『伝燈録』の現存諸本は、いずれも「凡情」を「凡心」とするが、後世の引用には「凡情」・「凡心」両形があるので、『伝燈録』そのものにも両形があったものと推察される。なお、「聖解」は「勝解」とする本文もある。)「凡情」は凡夫の迷い、「尽」はなくすること、「聖解」は聖なる悟り。ただし、本歌合では、「ほんしやう」を類従本は「本性」とし、判詞でも「ほん生」(類従本は「本性」と用いており、また、「聖解」にあたる箇所は「障導」(忠寄本は「障導」とする。さらに、六十七番比丘尼の恋の歌に、「ほんしやうをつくさむとこそおもひしにへちにしやうけのおとこおそろし」と、ここと酷似する表現が見られ、この「ほんしやう」を類従本では「本性」とする。これらのことから推察して、当時、「本性(生)」を尽くせ、別に障碍なし」とする、誤伝ないし誤解が一般化していたのかもしれない。その場合も、「本性(生)」は「凡情」に近い意で理解されていたか。「障碍」は、仏道の妨げ、障害。したがって、上句は、恋しさという迷いの心を捨て去ることができないので、の意か。下句は、それ以外に障害はないといっても、(それが一番大きい障害なのだから、総合的に見て)障害がないということにはならない、というのか。

◎われなすゝめそ この「勧む」は、本来、助詞「を」を介して勧誘する相手を表す語(ここの場合は「我」)を受ける用法であるが、その「を」が省略されている。同様の省略は、「くれてゆく秋だにわれなすてはてそなべての世こ

そ色かはるとも八実兼V」（玉葉集、十四、雜歌一）など、和歌にまま用いられる。私を勧めてくれるな。

◎しやいんかい 邪淫戒。仏教でいう五戒の一。正しくは、在家の者が守るべき戒（夫婦間以外の性行為などを禁じる）であって、出家が守るべきとされる淫戒（あらゆる性行為を禁じる）とは区別されるが、ここでは、後者の意で用いているものと思われる。

◎たもつやいなやこひはわすれじ 授戒のとき、戒師が「よく（戒を）保つや否や」と問い掛け、戒弟が「よく保つ」と答える儀式を踏まえた表現。ここは、邪淫戒を「保つや否や」という問いに対して、「恋は忘れじ」、すなわち、保たない、と答える異例の問答。以下に引用の、『弁慶物語』、弁慶受戒の場面を彷彿させる表現。『同じくは仏の御前にて戒を保たん。殺生、偷盜、邪淫、妄語、飲酒、この五戒をよく保つや否や』と言ひて、自ら答へて曰く、『殺生戒とは、物の命を殺さぬ戒めござんなれ。何と思ふとも、憎からむずる物を殺さずしてはこらへまじければ、殺生戒をば保つまじ。……妄語戒と申すは、空言いはぬ戒ござんなれ。人を害するほどにては、空言をせずしてかなはぬ事もありつべし。又、時として、人を助けんとするにも空言をもする習ひなり。仏の仰せも心得がたければ、妄語戒をも保つまじ。又、飲酒戒と申すは、酒を飲まざる戒めなり。ただし、観念、観法をいたさん時、驚動の心を起こさじがための戒めなり。人は知らずや、弁慶にをひては必ず飲酒によるべからず。偷盜、邪淫は保つべし。残りの三をば保つまじ。忘れ給ふな、仏』とて、問ふつ答へつ独り言して、……」（新日本古典文学大系『室町物語集 下』）。戒律をことに重んじる律宗の僧の歌である点が滑稽。

◎恋すれとも、猶ほん生をなけきたり 「ほん生」は、類従本は「本性」。恋をしてはいるが、一方でそのことを仏道の障害と考えて嘆いている、その分だけまだまだ、というのであろう。

◎猶かいをやふらんの心ふかし 恋をしても反省することなく、開き直って、戒を破ろうとする気持ち強い、というのである。

◎罪のすゝむ所、いましめふかきによりて、猶左可勝 罪の程度からして、右歌の方がより深く戒に触れるので、これも左を勝とする、というのである。なお、以上の評は歌そのもののよしあしとは関係がないが、禅宗と較べて、律宗の

僧の心掛けは、とうてい許しがたい、と強く非難したのである。勿論、冗談。

◎二 白石本は脱する。律家の言葉の頭の「一」(底本・白石本は脱する)とともに、会話の順序を示す記号。六十七番の比丘尼と尼衆との会話にも同様の記号が見える。

◎文字の上をきては、御不審たつへからず 「文字」は、言葉の意。「不審を立つ」は、疑わしく思つて質問すること。禅宗では、「不立文字」といつて、教典などの言葉の単なる理解を否定し、言葉の表面にとらわれずにその神髄を捉えるべきだ、とする。ここは、律家の詰問を、言葉を用いて尋ねてはならない、とかわしたのである。

◎若如何とならば、口をひらかずしてとひきたれ もしどうしても尋ねたいというのなら、口を開かずに尋ねてこい、というのである。禅問答独特の言い回しをまねた表現。

◎一 底本・白石本は脱するが、誤脱であろう。

◎けうけ別伝と申候は、なとや祖師とは仰候そ 「教外別伝」は、仏の教えを、教典などの言葉によらず、心から心へ直接伝えること。禅宗で、その教義を端的に示す言葉として、しばしば用いられた。「申候は」は、「申し候ふ上は」の意か。あるいは、「申し候はば」と読むべきか。「祖師」は、禅宗の開祖達磨のこと。あなたがたは「祖師」、「祖師」といつて達磨を崇めるが、その態度は、教外別伝という教義と矛盾するのではないか、というのである。

〔絵〕

禅宗は、鍮頭巾を被り、僧衣の上に焰子りやまを懸ける。手を組んで座禅の体。前に団扇。

律家は、僧衣の上に袈裟を懸け、左手に教珠を持つ。

〔参考〕

○ 夜のながければ座禅をぞする

竹串の豆腐のかべに向ひ居て

(竹馬狂吟集)

○ 座禪の人のねずみをぞ追ふ

僧堂にかつきつれたる猫頭巾

(同)

○ われらが宗体と申すは、教外別伝にして、いふもいはれず説くも説かれず、言句に出たせば教に落ち、文字を立つれば宗体に背く、ただ一葉の翻る、風の行方を、御覽せよ

(謡曲「放下僧」)

○ われらは来世の栄光と罪および靈魂の不滅を信じている。禪宗ぜんしゅうの僧侶たちは、それらのことをすべて否定し、生まれ死ぬこと以外には何もないと(みなしている)。

(日本覚書、四)